

2026年3月発行

茨木御堂 第307号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに 願いが かけられている

茨木別院令和の大改修



唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

(『真宗聖典』第二版二二九頁)

世界情勢が混沌としています。他国の町やインフラ施設への攻撃が繰り返されています。多くの人々の命も奪われています。現代社会は、科学が進歩したこともあり、人間の知識や技術が著しく発達しました。そのような中で、今までできなかったことが、できるようになってきました。

しかしそれらの知識や技能が、人の命や財産を奪うことに使われています。人類の幸せを願って生み出された知識や技能なのに、何故こんなことになってしまったのでしょうか。釈尊はその理由を、人間は自分中心の物の見方や考え方に執着し、無明に覆われているからだと言います。人間の現実、罪惡深重・煩惱熾盛です。そして、それが原因となって苦しむのです。

私たちは、自分の力で何でも解決できると思います。しかし、そうはいきません。すると、自分が悪いのではなく相手が悪いのだと言って他者に原因を求めます。自分の外に自分を苦しめる原因があると考え、それを解消し幸せを得ようとしています。この生き方を「外道」と言います。外道の行き着く先は、競争、争い、そして戦争です。勝てば、傲慢な人生が待っています。負ければ、自暴自棄か自殺です。

この現実をどう解決し、現実の生き方を願えばよいのでしょうか。その心を表現した言葉が、「唯よく常に如来の号(みな)を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし」といえます。「ではないでしょうか」。

私にはたらく如来の無限の慈悲と無限の智慧に護られ照らされて、悪業・煩惱に碍(さまた)げられることのない無限の能力である名号の心をいただくことで、真実の人生を歩む者になるということではないかと思えます。

南無阿弥陀仏 輪番 河原恵

茨木別院関連ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

茨木別院

検索

茨木別院 月行事ご案内

● 教如上人ご命日・五日講

・日時 五日(火) 午後一時半より

・会場 茨木別院会館 ・講師 加藤 恵師

● 本山九日講

・日時 九日(土) 午後二時より

・会所 専想寺 ・講師 茨木別院輪番

● 永代経法要ーお勤めと法話ー

・日時 二十五日(月) 午後一時半より午後三時頃まで

・会場 茨木別院会館

・講師 志紀 正機師(常願寺住職)

＊法要前(午後一時過ぎ頃) より茨木別院門徒会総会
を開催致します。

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

・日時 二十八日(木) 午後一時半より

・会所 茨木別院会館 ・講師 茨木別院輪番

● 教如上人ご命日・五日講

・日時 五日(金) 午後一時半より

・会場 茨木別院会館 ・講師 加藤 恵師

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

・日時 二十八日(日) 午後一時半より

・会場 茨木別院会館 ・講師 茨木別院輪番

● 茨木別院本堂諸殿令和の大改修 上棟式

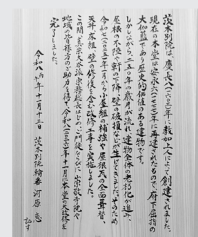
三月五日に工事現場の職人たちを招いて今回の改修工事の上棟式をお勤めしました。棟札には、令和の大

改修の由緒やこの事業に携わった方達の名前が書かれています。前回の再建された時の棟札と共に茨木別院本堂の屋根に納められました。



▲ 棟札

▲ 旧棟札



茨木別院は、慶長八(一六〇三)年に教如上人によって創建されました。現在の本堂は安永六(一七七七)年に再建されたもので、府下屈指の大伽藍であり歴史的価値のある建物です。

しかしながら、二五〇年の歳月が流れ、建物全体の老朽化が進み、屋根の不陸や軒の下降、壁の破損などが生じてきました。そのため令和七(二〇二五)年一月から小屋組の補強や屋根瓦の全面葺替、天井、床組、壁の修復を含む改修工事を実施しました。

この間、真宗大谷派宗務総長はじめ、ご門徒ならびに崇敬寺院や地域の皆様方のご助力を得て、令和八(二〇二六)年十一月に本堂の大改修を完了しました。

令和八年丙午年十一月十三日 茨木別院輪番 河原 恵

記す



新年度のスタートです

桜の花が満開の中、二〇二六年度が始まりました。

新学期、新年度は緊張や不安を抱きがちですが、毎日のちょっとした「あいさつ」が気持ちをふっと明るくさせてくれます。

あいさつが気持ちよく感じるのは、相手からちゃんと存在を認められたと感じるからです。目を見て名前を呼んでくれたり、声のトーンが柔らかかったりすると、大事に扱われているという安心感が生まれます。

気持ちのいいあいさつを続けていると、この人とは安心して話せそうという感覚が育ちます。そんな毎日の積み重ねが、心の距離を少しずつ近づけてくれます。また、自分から先に気持ちのいいあいさつをすると、不思議と自分の気分も少し前向きになります。

気まずさやモヤモヤをリセットする、小さなスイッチのような役割も持っています。

保育者からのあいさつは、子どもたちに「ここは安心していい場所」「先生は自分を見てくれている」というサインを送る役割があります。また、保育者のあいさつの仕方を日々見ることで、子どもは、人との関わり方、言葉で気持ちを伝える方法を真似しながら身につけていきます。あいさつから、子どもの様子を汲み取ることも重要です。信頼は大きな出来事よりも、同じことが繰り返される安心で育つとされます。

あいさつは「一番小さいけれど毎日できる信頼行動」子どもたち、保護者の皆様と気持ちのいいあいさつを交わすことで、信頼関係を築き、子どもたちの成長のお手伝いできれば幸いです。

保育教諭 南部早苗

食事と食することへの感謝

栄養士 前田 香織

私たちは毎日、当たり前のように食事をしていきます。その食事が多くの「いのち」によって支えられていることを忘れてはいけません。野菜や果物、魚や肉など、私たちが口にしていくものはすべて自然の恵みであり、運んでくれた人、料理してくれた人など、多くの人の力によって私たちの食卓に届いています。

食事の前に手を合わせて言う「いただきます」と言う言葉には、そのいのちや多くの人への感謝の気持ちが込められています。「いただく」とは、ただ食えるという意味だけでなく、大切ないのちを自分の糧として受け取るという意味があります。

園でも、「いただきます」「ごちそうさまでした」の言葉を大切にしています。すぐに意味を理解することは難しくても、日々の食事を通して、食事を大切にする気持ちや感謝の心が少しずつ育っていけばと願っています。

子どもたちがおいしそうに食べる笑顔を見るたびに、食することの大切さを改めて感じます。これからも子どもたちが食することの喜びを感じながら、いのちへの感謝の気持ちを子どもたちと共に育んでいきたいと思っています。



二〇二五年十一月十五日 日中法話②

「仏教における信仰の問題」(二)

講師：宮下 晴輝師 (大谷大学名誉教授)

(前号からの続き)

サンサーラ以外の語の訳にも用いられる「生死」の用例

しかしまた「生死」と漢訳されているものの原語がすべて「サンサーラ」だったわけではないのです。たとえば「色、受、想、行、識」という「五蘊」と呼ばれる言葉があります。これは、釈尊の最も基本的な説法のなかに用いられています。自分を頼みそれにとらわれることを「我執」と言います。その我執を離れることを説いた説法が「無我の教説」と言われるものです。その教説は、私たちが、我すなわち自己と見なしているものが何であるかを問題にするときに、「色、受、想、行、識」という語を用いています。これは釈尊の最初の説法に属するものです。これらの語を使って「無我の教説」が説かれています。「無我の教説」は、釈尊自身の仏道の根本課題に触れているものです。

「我」(自己)というものが存在しないから「無我」と説いているわけではありません。私たちは、「我」(自己)を頼

りにして生きています。しかしそこにどのような問題をもつかと
いうことです。いったい何が本当に信頼できる「我」(自
己)なのかを知りません。我(自己)ではないものを我(自
己)であると思つて、それを頼りにし固執しているのです。
そこに仏教が基本的な課題としてきた「苦しみ」の根本原因
があるのです。私たちが固執している我(自己)は、本当に
は我(自己)ではないのだということを明らかにしていくた
めに、「色、受、想、行、識」いわゆる「五蘊」と呼ばれる
言葉が用いられています。この五蘊とは、私たちが、自らの
生活経験の中で、我(自己)であると見なしている五つの代
表例なのです。そして私たちの生活経験のなかで、この五つ
以外に我(自己)と見なしているものがなく、その五つすべ
てが我(自己)ではないということを説き明かしています。
そのようにして、釈尊は無我ということばを使いますが、我
が存在しないことを無我というのではなく、我に迷っている
私たちに向つて無我だと説いているのだと了解しておいてく
ださい。

そういう我を確認していくときに五蘊がでてきます。そしてその五蘊一つひとつの漢訳の最初なのは「色、痛痒、思想、生死、識」となっていたのです。後の七世紀の玄奘の訳

だと「行」と訳されるのですが、もとは「生死」と訳されていたのです。その「行」とは、諸行無常というときの諸行のことです。もろもろのかたちあるものという意味になります。「諸行が無常である」という時の「諸行」も「生死」と訳していることが確認できます。

あるいは「誕生」を意味する「生」という原語が「生死」と訳されている場合もあります。また「老死」とあったものが、ある漢訳では「生死」と訳され、ある漢訳では「生老病死衆苦惱」(生老病死と衆の苦惱)という訳になっています。最初期の漢訳者たちが「サンサーラ」(漂流する、流転する)という言葉で「生死」と翻訳しましたが、その「生死」という漢訳の中には、単に「サンサーラ」だけを指して用いられているのではなく、そこにはもう少し含みがあります。いま言いましたような「諸行」とか「生」あるいは「老死」が「生死」と訳されているのです。その場合、その漢訳に含みがあつて、課題性をもつて「生死」と翻訳していて、機械的に翻訳したわけではないのです。

流転生死と出離生死

だから、「生死」とは流転の苦しみの中にあることだと考

えておきましょう。それはまた「諸行」といわれるものを頼りにして生きていく、ところが諸行無常であるという、何もしないというそういう苦しみがあるわけですから、そういう苦しみ全体を表して「生死」という言葉を使うのです。その生死を流転すると、漢訳者たちは受けとめてきたのです。だから流転という言葉は苦しみそのものを直接に表現しているのです。

それに対して、生死を出離するという言葉があるのです。その生死の流転の苦しみを超えるという課題です。苦しみを超えた生を表す言葉が「出離生死」なのです。流転の苦しみを超えた生、流転の苦しみのなかにあることを「流転生死」と言い、その流転の苦しみを超えた生を「出離生死」というのです。我われの課題と目標、仏道が成就しようとしていることが何であるかという、それが「出離生死」とあると、こういうふうに言えます。

沙門たちの求道の課題

ここに「流転生死」「生死を流転する」と漢訳されているのですが、そこに表されているもとの釈尊の課題を押さえてみようと思います。釈尊は二十九歳の時に出家して沙門

になります。この「沙門」とは何かということを知っておくべきでしょう。

釈尊以前に、紀元前六世紀ごろのインドで、「沙門」と呼ばれる人々がたくさん出てきます。沙門とは、インドの言葉で、シュラーマナとかサマナと言われた人たちで、それを音写して、沙門と言います。努める者というくらいの意味で、道を求めて努めるもの、つまり求道者きゅうどうしやを表す言葉です。

伝統的なヴェーダ聖典を中心とした宗教がありました。それが後に、紀元後ですが、ヒンドゥー教となります。ヴェーダの宗教の中には、いろんな神々が出てきます。元々は自然的で素朴な宗教であり、幸せになるために神々に祈りをささげる宗教です。自然界の力あるものを神と呼んだのです。基本的には部族単位ぶぞくで生活していて、部族の繁栄を祈るために、そういうヴェーダの宗教というのがあるのです。

紀元前六世紀ごろになると、そのような宗教では間に合わないと考える人たちが出てきます。部族同士で生活していて、部族の繁栄ということが中心で、部族の間で戦争もします。しかし人が生きるということでは、そういうことだけが問題になるわけではなく、生きていくというこの中において、やがて古い病み死んでいくということがあります。そういう問

題です。部族という集団生活の中では、個としての人間のことがなかなか問題にならない。個人として生きる人の問題、たとえば私は死が恐ろしいと、そういうことを言うと、お前は軟弱だと、部族からは見られる。とても戦争なんかしたくないと、そんなら部族の役に立たないと、こういうかたちで切られてしまう。そういうための、部族の繁栄のための宗教であつたのだから、そういう宗教では、自分の死の不安などを、本当に真剣になって考えていくことができないのです。だから新しいかたちで道を求めていくということが当然おこるわけです。そういうことが紀元前六世紀以降に起こつてきたのです。

そういうことが起こるのは世界的な状況なのです。自然的な宗教の中から、個としての生きる人間のことが問題になってくる。個が問題になってくる。沙門たちは、そういう問題を、共通の課題として、「苦く、流転るてん、業ごう、解脱げだつ、涅槃ねはん」という言葉で語り出しているのです。

苦しみとか、流転とあります。この時代になって流転ということも語られ出すのです。もともとヴェーダの宗教の中で流転ということは問題になっていません。この時代の沙門たちの思想として使い出された言葉なのです。

苦しみが思想の課題になっています。苦しみということが問題になるというのは、これは部族の問題ではなく、個としての人間のことになります。そこに眼がいったのでしょうか。そういう苦しみであるかは、沙門たちによってそれぞれ異なります。ただこの苦しみは、この時代に、流転という言葉で表現しなおしています。たまたま生まれて死ねば終わってなくなってしまうという、そういう苦しみではない。同じ苦しみを生まれてくるずっと以前から繰り返していて、死んだ後もまた同じことを繰り返していくという、そういう苦しみの重さを受けとめて、流転という言葉を使うわけです。だから流転とは、過去がかくかくの生涯で未来はこんな生涯だろうという物語だけがあるのではなく、苦しみという大きな問題を語るために、流転という言葉を使っているのです。

そして、どうしてこのような苦しみの中にあるのかを解きたいわけです。自分なりに理由を見つけない。それは、自分の過去の行為によるのではないかと。それを業ごうということとで語ったのです。業は行為ですから、簡単に言えば、善き行為や悪しき行為があります。行為にはそういう性格があります。善き行為を繰り返せばそれに見合った人生がやってくる、悪しき行為にはそれに応じただけの結果がやってくると。それ

を業報ごうほうといいます。業の結果、業に従った、業に応じた結果がその人生にやってくるという考え方が、この時代に生まれます。因果応報とも言います。業の結果として受けとめるというのは、自分の問題として考えていく、苦しみに対して責任をもって生きていくということでもあります。これが業の問題です。これで、苦と流転と業ということを行いました。いずれも苦しみを問題としています。

こういう流転し苦しみを受けていることから解放されることを、解脱げだつと言ったわけです。解脱という言葉は、解放、苦から解放放たれるという意味です。そして解放されて涅槃を得るのです。「涅槃」というのは、インド語を音写したものです。インド語ではニルヴァーナといいます。方言のニッバーナを「涅槃ねはん」と音を写したのです。苦しみが消えて静け



さが訪れた世界を涅槃と言います。不安から解放され、安らかに信頼できる世界を得られること、それを涅槃ということです。これを求めようということが、沙門たちの課題であったわけです。

(完)

《合祀納骨案内》

合祀墓を増設いたしました。詳細については茨木別院事務所までお問い合わせください。

■特別納骨

納骨料…五〇万円

■個別納骨

納骨料…三〇万円～一〇万円

※法名プレート刻銘料三万三千元が別途必要となります。

■合同納骨

納骨料…七万円

●茨木別院事務所

☎〇七二―六二二―二九〇三



敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋一念

俗名 九鬼俊一 九十六歳

●法名 威徳院釋尼喜愛

俗名 新井多喜子 八十八歳

●法名 清浄院釋名義

俗名 林政義 九十六歳

●法名 釋尼修紀

俗名 林紀子 八十七歳

●法名 釋薫修

俗名 古川修 九十二歳

編集後記

茨木別院改修工事の上棟式が執り行われました。

安永六年の再建時の棟札とともに、今回の令和八年の棟札が納められます。

この棟札が次に目にされるのは、一〇〇年、あるいは二〇〇年先、茨木別院が再び工事を行う時のことでしょう。また、瓦には瓦懇志をいただいた方々のお名前が記銘されました。これらもまた、次の世代、あるいはさらに先の世代の方々の目に触れることとなります。改めて、茨木別院の持つ歴史の重みとつながりに触れさせていただきました。



この改修工事によって美しく整えられた本堂が、次の一〇〇年へと受け継がれていくことを願っております。
竹内 明人

株式会社 花 廣

— 生花・供花・けいこ花 —
茨木市大手町二二一八

☎(〇七二)六二二―二四〇二